

40) CEA による癌術後モニタリング

—糖尿病合併時の変動—

赤井 貞彦・島田 寛治 (県立ガンセンター)
 佐々木 壽英・加藤 清 (新潟病院外科)
 佐野 宗明・田島 健三
 佐藤 幸示 (同 内科)

消化管癌術後の再発モニタリングとして血中 CEA 値測定が常用されているが、癌再発によるとは考えにくい CEA 値の上昇に相遇することがある。

胃癌術後 2 年余りの症例で 10ng/ml (ダイナボット・キット) を越す激しい増減を示す一例を経験したが、約 8 ヶ月の経過で CEA 値は正常化した。後にこの時期に糖尿病の悪化があり、他医にてこの治療が行われていたことが判明した。その後同様の症例を経験したので胃癌及び大腸癌の術後長期追跡例を再検討した。

胃癌 5 年以上経過再発例 38 例の大部分は 5ng/ml 以下にあり、その中 22 例は 2.5ng/ml 以下で経験したが、糖尿病合併 6 例はすべて 2.5~5ng/ml の値を示した。

CEA によるモニタリングには糖尿病合併の有無をチェックする必要がある。

41) 当科における老人外科の現況

—80才以上の手術例の検討—

斎藤 六温・鈴木 茂 (刈羽郡総合病院)
 関矢 忠愛・植木 光衛 (外科)

最近の高齢化社会では手術の対象年齢も上昇し老人外科により大きな関心を払う必要がある。当科における 70 才以上の手術は件数・割合 (入院総手術数に対する) とともに 5 年前より急激に増加している。超高齢である 80 才以上の手術も同様であり、昭和 55 年 1 月から昭和 60 年 8 月迄の 80 才以上の入院手術患者を検討した。手術件数は 96 件で男性 46 名、女性 50 名であった。悪性疾患の割合は昭和 58 年以降は 50% を越え、今年は 63% に達している。逆に緊急手術の頻度は年々減少している。術後合併症は 16 例 (16.7%) に発生した。16 例中悪性疾患は 11 例であり、全麻は 15 例に施行された。術後合併症の内容は呼吸器合併症 8 例 (肺炎 6 例)、循環器合併症 5 例 (心筋梗塞 4 例) であり、この両者で合併症の 80% をしめた。16 例中 11 例 (68.8%) が入院中に死亡し、7 例は手術死亡であった。我々は術後の呼吸管理にレスピレーターを使用し、術後合併症を減らそうと努力している。

42) 当院における高令者 (80才以上)

手術例の検討

小柳 隆介・大黒 善弥 (燕労災病院)
 塚田 昭一 (外科)

昭和 57 年 7 月から、昭和 60 年 10 月までに、80 才以上の高令者手術は、30 例であった。

男 12 例、女 18 例で、全麻 23 例、腰麻 7 例である。全麻のうち、9 例が腹膜炎、消化管出血、イレウス等の緊急手術であった。手術死亡はなく、1 年以内死亡は全て腫瘍死であった。全麻症例のほとんどに、呼吸器を使用する呼吸管理を要し、挿管日数は最短 1 日から最長 30 日に及んだ。高カロリー輸液を要したのは、約 1/3 の症例であった。インスリンを必要とする糖代謝管理も相当数に要した。その他、精神症状、術後のボケ等、若年者にはない特殊性もあり、それらについて検討し、言及する。

第 3 回新潟心臓画像研究会

日 時 昭和 61 年 4 月 12 日 (土)

午後 2 時 ~ 5 時

会 場 有壬記念館 (旧大学本部跡)

A. 一般演題

(1) RI

1) 拡張期パラメーターに及ぼす心拍数の影響

木村 元政・賈 少徹 (新潟大学)
 小田野幾雄・酒井 邦夫 (放射線科)

山本 朋彦・津田 隆志 (同 第一内科)
 荒井 裕

2) 冠動脈疾患における運動負荷時心筋虚血と LVEF の反応

—心臓核医学検査法による検討—

畠野 達郎・津田 隆志
 古寺 邦夫・関間美智子 (新潟大学)
 小島 研司・大塚 英明 (第一内科)
 渡辺 賢一・柴田 昭

木村 元政・小田野幾雄 (同 放射線科)

3) 胸痛を訴える左脚ブロック患者の TI-201 負荷心筋シンチと冠動脈造影の検討

牧 松雄・田村 雄助 (立川総合病院)
 岡部 正明・大滝 英二 (循環器内科)
 松岡 東明

春谷 重孝・坂下 勲 (同 胸部外科)